

ジャン・ステッツェル¹⁾の論文「社会科学，人文科学 の世界的貸借対照表は可能か」²⁾

森 川 甫

蔵内数太博士は1976年10月14日、大阪で開催された日本フランス社会学会において、「フランス社会学と日本——田辺寿利を偲んで」と題して記念講演され、そのなかで、西欧と非西欧の文化をともに理解しうるのは、日本人ではないかとするフランス側からのアピールとして、ジャン・ステッツェルの論文『人文科学と社会科学の世界的貸借対照表は可能か』を挙げ、この論文のもつ意義を指摘された。以下、この講演の概略、特にステッツェル教授の小論の意義について、ごく簡単にではあるが、言及したのち、この論文の翻訳を試みたい。

この講演において、蔵内博士は極めて該博な学識を駆使して、フランス文化と東洋文化、とりわけ、フランス社会学と日本の交流を明らかにされた。(この講演は同学会より印刷されると報告されていたが、未だ刊行されていないのは残念である。)博士の講演の概要は次の通りである。

本問題に関するすぐれた研究として、後藤末雄著『支那思想のフランス西漸』(昭和8年)、小林太市郎著『支那思想とフランス』田辺寿利著『フランス社会学の成立史』(田辺寿利著作集第一巻、未来社)がある。東洋思想のフランスへの影響としては、ピエール・ベールを通して儒教がフランスに紹介され、孔子崇拜が起る。また、芸術の分野では浮世絵が印象派に大きな影響を与える。他方、西洋思想の日本への影響は三段階に分けて考えられる。1) オランダを媒介として、2) フラ

ンスとの直接交流によって、3) 社会学の専門領域間の交渉による。

1) オランダを媒介とするフランスとの接触。『厚生新篇』³⁾(ノエル・ショメル原著、文化8年一天保6年、馬場佐十郎貞由、大槻玄澤茂質他訳、貞松修蔵編、昭和12年刊。恒和出版、昭和53~54年刊)の出版があり、また、ハルマ Halma の『蘭仏辞典』に基づいて、『蘭和辞典』が刊行された。西周、津田真道がオランダに留学し、コント派の哲学者として高名なオプゾーメル W. Opzomer の思想に接し、また、ライデンでフィッセルリング S. Vissering の講義を聴き、その講義の翻訳として、津田訳『泰西国法論』(慶応二年)および、神田訳、西序『性法略』が刊行されている。

2) フランスとの直接交流。池田長発が文久3年、遣仏正使として、また、徳川昭武が慶応3年、同じ遣仏正使として、渋沢栄一、青淵百話を同行して渡仏した。司法郷、江藤新平が井上毅を従えて、フランスを訪れ、中江篤介が司法省出仕留学としてフランスに赴いた。アルフレッド・フイエ Alfred Fouillée 著『理学沿革史』が明治19年刊行され、また、ボアソナード Boissonade が明治6年来日し、東京大学で「自然法」を講義した。(井上操訳『性法講義』)ボンヌ著、箕作麟祥訳『泰西勸善訓蒙』が明治5年刊行され、また、フリケ著、松田正久訳、西周序『小学道徳論』(原著はドイツ語、邦訳はフランス語訳から)が

1) Jean STOETZEL, 1910年生。パリ大学教授、C. N. R. S. 社会学研究所名誉所長、フランス世論研究所々長、ユネスコ代表団社会科学委員会委員長、その他。
2) Un Bilan Mondial des Sciences Sociales et Humaines est-il possible? *Revue française de sociologie*, avril-juin, 1963.
3) Noël CHOMEL *Dictionnaire économique, contenant divers moyens d'augmenter son bien, de conserver sa santé....*, 初版(1709年)から第五版(1767年)の他、アムステルダムなどで海賊版が発行された。Cf. *Les Chomel, médecins et leur famille*, p. 38.

発行された。また、明治20年には、コントに由来する「人類教の立場で儒教を評価批判している」ピエール・ラフィット Pierre 著、『シナ文明概観』¹⁾が横浜で出版された。

3) 社会学専門領域間の交渉。明治・大正期には、コント、クールノ、デュルケム、タルドが紹介され、建部遯吾、特に、田辺寿利が大きな貢献をなした。タルド Tarde 著『未来史の断片』（大正14年）が刊行された。

今日の交流の問題で注目すべき提言は、マルセル・モス著「日本の社会学者に寄す」（田辺・古野訳、『社会学』5号、昭和8年刊。のち発禁となる。）にすでに現われているが、戦後、注目すべきものとして、ジャン・ステッツェルの論文「社会科学、人文科学の世界的貸借対照表は可能か」がある。この論文においてステッツェル教授は西欧と非西欧との交流、相互理解の役割を荷なうことのできる民族として日本人を挙げている。「今や相互のあいだの絆を結ぶことのできる諸国民がいる。最もよい位置を占めているのは、多分、日本人であろう」と著者は述べ、その理由として、日本人は伝統文化を保持しながら、しかも、西欧科学を修得していることを指摘し、この日本人が西欧と非西欧の相互理解の絆として、その役割を果たすことに大きな期待を寄せている。

以下、ステッツェル教授の示唆に富んだ論文の翻訳を試みた。

ユネスコの最近の協議総会において、フランス代表団は次のような決議案を提出した。すなわち、「社会科学および人文科学の領域における研究は経済的社会的進歩に重要な貢献をもたらし、また、これらの領域における研究傾向の調査は、社会科学、人文科学によって提供される諸々の可能性を諸国間の協力により、よりよく利用することを可能にし、さまざまな国における研究方向にかなりの効果を与えるであろう。これらの理由の

故に、社会科学、人文科学の領域における研究の主要な傾向に関する調査をユネスコが企画するべきであり、1963年から1964年の間に、関係する国際的な、諸国政府の、また民間組織の共同作業により、場合によっては専門家の協力を得て、この調査に必要な資料を収集し、また、次の会期中にすでに完了した作業を協議総会に報告し、また、この企画を完成するための適切な方策を提案する権限を事務総長に与えるべきである」と。ジャン・トマ²⁾も賛成するこの決議案は、その原則が1958年11月14日、国際連合総会において採択された、精密科学と自然科学の領域におけるオージェ³⁾報告^[1]という先例に根拠をもっていた。

日本代表団が全く別個の仕方によって非常に類似した提案を準備していたが、若干の小さな修正をして、我々と共同提案することになったことを強調するのは無用なことではない。のちに、この案件は約10カ国によって調印されたのち、協議総会に上程された。これは何の反論もなく、全会一致で採択されることになった。

このことは恐らく、協議総会の重要な成果の一つであろう。人文、社会両科学の研究傾向に関する調査を推進することは、実際、考証的研究とは全く別の価値あることである。記録された反応の意味を正確に分析することが肝要であると同様に、提案にさいして重大な意味をもつ意図を明らかにすることによって、この調査の重要性をここで強調することは適切なことである。いわゆる「人文」科学と、いわゆる「社会」科学（これは典型的なアングロ・サクソンの区別である）を同一の貸借対照表に入れることは、国際機関においてこの点に関してはびこる区別を不幸なものとなすならば、すでに評価すべき成果をあげていることになろうということ、ついでながら指摘しておこう。^[2]

出発点においては、この着想は「オージェ報告」

1) Pierre LAFFITE, *A general View of Chinese Civilization and of the Relation of the West with China*, 1887. 蔵内数太著『社会学』培風館、昭和37年、p. 85, 参照。

2) Jean THOMAS, 1900年生れ。国民教育名誉督学官、フランス・ユネスコ協会会長。

[1] 『科学研究の現今の傾向』*Tendances actuelles de la recherche scientifique*, Paris, U. N. E. S. C. O., 1961, p. 262. [] は原註を表わす。

3) Pierre AUGER, 1899年生れ、大学院会員。元パリ大学教授（物理学）、ユネスコ科学部門の責任者。

[2] Cf. マンドラ H. MENDRAS『社会科学の現代的傾向の貸借対照表のために』《Pour un bilan des tendances actuelles sciences sociales》, *Information sur les Sciences sociales*, I, (3) octobre 1962, pp. 39—48.

という均斉のとれた報告の先例を決して凌駕してはいなかった。実際、オージェ氏は1年間、全力を尽してこの任務に専念し、民間国際組織に援助されて、精密科学、自然科学の領域における研究の主要傾向に関する著書を出版した。世界的な報告をきわめて適切に取り扱ったので、「某地で、某国の、某生理学者がかくかくのウイルスを研究している」というような些細な点に陥いることなく、彼は問題の基本的性格を明らかにし、かえって驚くべき総合をなしたのである。人文科学においてなしたいと願っているのは、この種の総合である。

この領域固有の障害は相当なものであり、有効な貸借対照表を作成することは極めて困難であることが直ちに認められた。しかしながら、このプログラムの全体が徐々に実現されるであろうことを確信できるようになった。

最初の困難は、精密科学、自然科学とは何かに関しては、おおよそ知ることができるとしても、「社会科学、人文科学」（既述の理由で用いている表現）とは何かに関しては、はるかに知られていない。それ故、私たちの計画は社会科学部門だけを対象としていているのではなく、文化的行動の部門をも対象としている。後者の領域内にある学科目の間で選別をすることが必要であろう。例えば、博物館学を対象とすることはまずあり得ないが、逆に、歴史学、地理学、「文化人類学」（アメリカ的表現を再び用いるならば）の如きものは確かに対象となるであろう。

この明白な困難さの他に、この企てが人間科学の基礎自体をどの程度まで問題とするかとまさに私たちに迫ってきたもう一つの困難が付け加わる。実際、学科目とその内容の吟味を司ることになる概念化は、教義とか、イデオロギーとか、あるいは、文化とかに関わろうと、ある特定の思想体系に依存すべきではないであろう。ところで、まさに人文科学、社会科学は現にそうであるように、つねにそのような体系に依存している。きわめて明瞭な、一つの例をあげると、経済学は西洋と人民民主主義国において決して同一のものではない。最近、ソ連人によって古代文化史概論が出版された。フランス語版も出版されたし、また、マルキスト精神によって書かれている。古典社会

に関するマルキストの歴史に対して市民権を拒否する理由はない。それはまた、研究に関することであり、また、私たちの考えでは、この分野においては誰も法的には、優先権を持っていない。しかし、大きな思想的相違にもかかわらず、今度はもっと広い意味、つまり、ヨーロッパ起源の文明の意味にとられた「西洋」に固有の文化とか、言語社会とか、概念的枠組の社会もある。ところで、この第二の意味にとられた「西洋的」体系とは別の文化体系が、もちろんある。

それを用いている利用者の大多数が気付かないで、相当数の共通概念、基本的思想をもって、地中海周辺で我々が発展してきたことは明白である。すなわち、心理学、社会学の概念が個人と社会集団に関するあるイメージや社会集団内部における人間関係に根拠をおいているのは、全く明らかである。それはキリスト教的、また、恐れずに述べるならば、個人主義的概念である。そして、それは社会主義国においても同様である。ところで、過去においてだけでなく、我々が書いている現在できえ、決してそれは地球上の他の民族の事実ではない。精密科学、自然科学の領域においても同様なことを述べなければならぬことに注目せねばならないだろう。なぜならば、例えば、アフリカには我々のものと異なる人間に関する生物学的、また、生理学的解釈があるからである。アフリカの医学、「未開人」の医学、妖術者の医学、未開地の医学については誰も決して語らない。それは効果を生み出している医学である。それは我々の医学よりも優れているのか、劣っているのか、そんなことは問題でない。それは根づいたものとして存在している。それ故、これらの科学やこの生物学やその結果を順次、化学、物理学、薬力学の面で考慮しなかった点を、ある意味では、「オージェ報告」の欠陥と考えることができよう。しかし、迷信として現われているものを、西洋的系統とは別の科学的発展として真面目に考えることを科学者に要求することは困難である。

科学に関する多分狭い、この考えは、その規準が我々の領域よりも明確な精密科学において考えられる。このような考えは人文科学においては、もはや可能ではない。なぜならば、我々の民俗学的経験により、一つの文化が他の文化より有効で

あると言っているのは、条件付きでのみ考えることができるからである。

その上、社会科学、人文科学に関する西洋の概念の性格が初歩的であるのに驚かされる。逆に、他のところで時折見られる極端な豊かさに驚かされる。確かに、他の文化は我々の文化と同じような効果的な技術によっては発展しなかった^[1]。その代り、人間存在に関する彼らの分析手段はしばしば我々を驚かす。伝統的インドに関しては、インドの心理学がある。インド諸語の語彙には、すなわち、いずれの場合でも、インド諸語のうちで最も古典的な言語の語彙は、「私」、知性、感情のようなことを表現するために、幾つの単語があるだろうか。これらの諸語のどれにも、およそ 100 ある。ということはつまり、正確には同義語は決して存在しないから、多数の重要なニュアンスがあることを意味する。これらの繊細なニュアンスは、人間認識の見地からいうと、莫大な関心を表わしている。豊かな人文科学の領域内でこの関心の適用を験していると考えすることはできないであろうか。

同様に、インドにおいては道路わきに「ヨガ実習所」という看板が見られる。この技術の基礎には、我々の心理学的理論とは比較し難い心理学理論があるが、それは恐らくやがて、我々の心理学理論と歯車が噛み合い、それを補い、そして、心的機能とは何かに関して、はるかに広大な像を形づることができるであろう。

さて、今、政治学の場合を採り上げよう。西洋の政治的技術もまた、幾分か初歩的である。これに反して、いわゆる「未開」国家の、人間的技術の豊かさを明白に示すことができる。たとえば、アメリカ・インディアンについて語ることもできるだろう。また、アフリカの地方政治の実態を経験すると、——夫々の地方によって非常に異なっている実態であるが——チェック・アンド・バランスのシステムを賢明に使用していることが明らかになる。かくして、秘密結社の利用は、大抵の場合、ここで想像しているものではなく、所属が秘密のまま、厳密に実施され、機能を正しく保つ

ている。そういう結社が存在することは誰一人疑わないのであるが、この結社の外では誰がそれに属しているか、誰ももちろん知らない。ところで、協議集会では、これらの結社は個々の議員を通して、団体としての意志を表明している。従って、誰かがある事柄について述べる時、恐らく、彼は結社の名で述べているのである。そして、誰であるか分らないが、秘密結社の内部でまさに出合った人々によって、彼は支持されるであろう。こうして、これらの結社は集団を「ひそかに」表現している。しかし、これらの秘密結社は同一の部族に二つしかないというのではなく、10も15もありうる。そこからきわめて複雑な細文化が結果する。従って、地方の首長、つまり、行政者が絶対者に近い、理論上の権力を所有していても無駄である。このような権力は男とか女の、かくかくの結社の集団の意志によって、たえず制限されている。そこには、我々の理論家にはほとんど知られていない政治機構の特長があり、そして、それは権力の均衡に関して、考えさせることのできるものである。

これらの同じ協議集会において、多数決でなく満場一致による、説得と決定の技術にも注目することができる。もちろん、この満場一致は思想の一致とか、集団の全構成員の一律性ではなく、2日間の激論の末、あなたの提案が認められない時に、最も強いと感じる意見に漸次、あなたを近づかせる、ある種の用心深さであり、社会心理的慎重さである。それは恐らく、話す者が——必ずしも初めから多数派ではない——最も雄弁であるか、それとも、より多くの支持者を得ているか、外部の味方を持っているからであろう。いずれにしても、あなたは満場一致の決定に加わる。それ故、不満がある場合でも、1票の差で敗れる少数派の不満の形は決してとらないであろう。潜在的な、攻撃的な響きをもった少数派の観念はほかさされ、あるいは、消えている。この実態は、事実、我々の議会の実態よりもはるかに微妙で、複雑な社会心理による。

これらの実態については、理論の表現されな

[1] シンハ SINHA, J., 『インドの心理学—知覚—』 *Indian Psychology: perception*, London, Routledge, 1934, 400 p.

い、あるいは、むしろ、それらを表現する人々がいるところ、つまり、形をとっていない理論にさかのぼらなければならないだろう。世界における人文科学の貸借対照表はこの種の努力なしには考えられない。言語活動のなかに含まれている人間科学の役割とさまざまな諸民族の心理的、社会的実態のなかに含まれている人間科学の役割を汲みとらなければならないであろう。この言語活動や実態が生じさせることのできた諸理論を、口頭あるいは筆記によって体系的に表現するように努めなければならないであろう。このことなくして、我々の固有の人間科学は非西洋諸民族を理解することができないであろう。

☆☆☆

このように貸借対照表を方向づけることは、多かれ少なかれ、公然とした反論に出会うであろう。まず第一に、提案を好意的に受け入れたすべての人々が、提案された形で問題をさらに推し進めることを望んだと思うべきではないであろう。フランス委員会においては、ほとんど例外なく全員がこれをなさねばならぬと理解した。なぜならば、これは現状に合致しているからである。もちろん、直ちに理解されたわけではなかった。魔法を再び生かし、古い迷信を勇気づけることだけに関係があると考えることができたであろうし、また、我々の文明の得たものを、開発途上国に伝達することに執着する人々は幾分かの不安をもったであろう。

他の人々はそれを策略の問題と考えた。つまり、このお祭に貧しい近親者として参加する開発途上国の代表者たちに、西洋科学の優越性の展示を受け入れさせることが問題であるというのであった。・・・この意図の多義性が、結局、この提案をよりよく受け入れさせるのに役立つということはある。しかし、そのことから、乗り越えることをまさに望んでいる限界を越えて実現するさいに、障害が生じることもありうる。

なぜならば、これらの障害はより広い科学的受け入れを考えるとときに遭遇するかもしれぬ困難さのなかにも、存するのではないからである。すでに、かなりの数の研究を取り巻いている秘密の故に、人民民主主義国とソ連邦における若干の困難さを予見することができる。軍事的秘密である

うか。それはまれである。よくあるのは、文化的領域において他国を凌ぐことに名誉をかけている国は、その国自体のイデオロギーによって制約された解釈に閉じ込められ、例えば、社会学のような学科目において遅れをとったことを認めようとしないという意味での政治的秘密である。しかし、事を荒だてることなく、まもなく、成果のより容易な交換とか、さらに共同研究に至ることを我々は期待するのである。

「発展途上国」との関係に関しては、問題は一層微妙である。我々のしたような提案が発展途上国の代表者たちによって、混じりけなく純粋に受け入れられるということは信じないでおこう。彼らとの文化的関係はきわめて複雑であり、また、ある反応の存在理由を理解するには、我々がかんたんなりの努力を払うことがしばしば必要である。

これらの反応は挑戦的な要求として表われる可能性がある。——それは要するに、我々が望んでいる明白にする努力を引き受ける一つの方法である限り、一つの善であろうけれども。——もうすでに見られていることではあるが、彼らの国において、ヨーロッパの大学で教育を受けた人々の学問を考慮に入れるだけでなく、その国自体、また、その伝統から出たものに注意を払うことを要求する「第3世界」の代表者を見るようになるであろう。このような要求は我々の願望を先行するものである。しかし、自ら、発展途上国と感じ、ある意味でそれを認めているが、そのことを苦しみ、そして、彼らが西洋人と文化的に平等の立場に立っていることを宣言したいと思っている人々によって、この要求が提出されているのは当然のことである。そして、彼らはこの平等が与えられるのではなく、激しい闘いによって勝ち取られることを熱望している。それ故、問題の多義性は、国民的発意や、さらに、ある刺激的な緊張に余地を与える限り、利益を与えるものとなるであろう。

克服するのがさらに困難なのは、非西洋国家自体の科学者から出される留保であろう。「アフリカのある地方には、精神とか、身体とか、個人と宇宙との関係とかに関するあるイメージに基づいて、また、正しい、あるいは誤った理論に基づいてたてられた、すばらしい精神病理学や精神治

療医学的方法がある。有効な治療の基礎とは一体、何であろうか。」と言おうとするのがヨーロッパ人である必要があるだろうか。これを言うのが、アフリカ人の精神病医であることを切に願うものである。ところが彼らは反抗して、まさに彼らが進出した未開状態へ彼らを連れ戻そうとしていると考えるのである。我々の程度より低い人間科学に彼らを閉じ込めることによって、軽蔑されていると彼らが思い込むことがありうる。ところで、そのようなことは、我々の望むところでもなく、また、これらの国から西洋の心理学、社会学、人類学の所与を奪おうとするのが問題なのではない。つまり、今後樹立しなければならぬ交流は一方通行ではない。しかしながら、我々の認識論によって得たものが強要された征服であった人々のあいだでは、この懸念が当然、晴らされねばならぬ。

なぜならば、多くの国においては、「植民地解放」は未完成であり、深い構造的変化を伴っていることを理解しなければならない。従って、アフリカ社会は過去において、また、現在においても、しばしば局部的に強い階級社会である。ここで私の個人的体験を思い起すことを許していただきたい。私は学術使節として訪れた時、臨時の通訳として不用意にもヤウンデ¹⁾の高校の、バミレケ族²⁾の3人の生徒を連れて行った。私は一、二の部落へ行った。私はその首長から敬意をもって迎えられた。つまり、外国人という身分の故に社会的身分が障害となることがなかった。しかし、とりわけ、私は音楽会にこの3人の青年を出席させることができなかった。彼らは貴族ではなかったからである。教養とか富の程度がどのようであろうとも、貴族のみがその身分に備わっている名誉を受けることができるからである。

ところで、人生の偶然からとか、上層階級の人々が我々の高校で与える教育を軽蔑した故とかで、西洋の教育を受けたのは、大抵の場合、社会階級の低い人々であった。そして、これらの人々

は古い体制を承認しないし、また、そのこと自体によって、これらの体制に結びついている文化的要素を拒否する。彼らは多分、我々の試みを反動的と考えるであろう。「もしもそれが続いておれば、私がいづまでも奴隷の息子である故、私たちが棄てた状態——彼らは文化的と言っているが、実際は、社会的という意味である。——に、あなたは私たちを留めようと望んでいる。」 伝統文化の支持者と西洋化の信奉者との間で、アフリカやその他の国で現に現われている緊張は部分的には——事はそんなに簡単ではないが——現に行なわれている権力の変転をめぐる、異なった社会階級の対立による緊張である。しかしながら、先ほど述べたこれらの要求として表われた反応を比較して、ただ単に支離滅裂と結論してはならないし、また、激しく対立する2党派の表現と結論してもならないであろう。何故ならば、ある様式の伝統的思考を価値あるものと認めることは、問題としたばかりの伝統主義と全く同一視することでは、おそらく、ありえないからである。これはジョルジュ・バランディエ³⁾がその著『多義性のアフリカ』⁴⁾において強く指摘した要点の一つである。しかし、かつて植民地であった国の社会階級とその国を支配した国の代表者との間にある関係の多くの形態において、その多義性は意味を持っていることを付け加えて言わなければならない。科学的進歩において、また、それに直面して、自らを主張する同じ必要性から、土着の価値に頼ることと、それらを賞揚することに対する異議申し立てが生じる。しかし、あるときは同一人物によって、またあるときは他の人物によって表明されるこの態度決定は、必ずしも政治的支配ではないが、他の支配方式を表現している侵略文化に対して、その独自性を総体的に主張することが問題となるに応じて、あるいは、最も古い勢力を助長することになるかもしれぬ、うるさい善意から自らを守るに従って、部分的に異なる状況の結果である。

1) Yaoundé カメルーン的首都。

2) カメルーン西南部に住む黒人部族。

3) Georges BALANDIER, 1920年生れ。パリ・ソルボンヌ大学教授、C. N. R. S. アフリカ社会学・地理学研究所所長、等。

4) *Afrique ambiguë*.

☆☆☆

確かに、この多義性から、我々の望んでいる企ての成功するチャンスについて不安が生じている。今しがた粗描した分析が、一見して途方に暮れさせる反応を前にした価値判断ではなく、また、我々によって発見された彼らの真実であるかもしれぬ事柄を、ある人々とかある国民に、意識させるための試みでもないということ、まず第一に確認しなければならない。

人間諸科学の協力において、今日まで認められていない観念や技術や学科目のなかで、その部分的役割を果たすのに、何が良く、何が悪いかを知らなかったことを我々は繰返し述べてきた。いわんや、最も直接的な関係者がこれらの科学に関して持ちうる反応を我々は判断することができないであろう。ただ、これらの科学は我々自身の関心をひき、全体として、社会科学、人文科学にそれらの所与が樂く利益を我々に予感させるということだけは言いうる。

隠された、そして多分、恥ずべき真実、内密の感じ易い、あるいは不安な過程をもつ真実のヴェールをはぐものとして現われるであろうものに関しては、ヴェールをはがれた諸点は時宜を得ない介入がうるさいものだという理解させる役割のみを持っているということ、我々に注目させるであろう。文化的に、また社会的に再建途上にある諸国民の真実のヴェールをはぐ試みをしなればならぬとしたら、多くのことを述べねばならないであろう。積極的であれ、消極的であれ、まさに如何なる価値が伝統的、あるいは、輸入された思考形式に付着していると彼らには見えるであろうか。社会階層間の役割の置換は如何なるリズムや如何なる様式をとるであろうか。この領域では確信を持つことができるし、また、他の人々は違った仕方ですら判断しうる。つまり、ここでは信仰告白を展開する必要も機会も多分ないであろう。

従って、現在では、この探究の機会が大部分、科学の基礎的原理の保管者自身の主導か、あるいは少なくともその協りに依存しているので、探究の跡を辿ることは不可能である。この問題では進展を促がすことはできないであろう。第一段階においては、また、「オージェ報告」との釣り合いの

ため、西洋国家——ここでいう西洋とは社会主義国も含む——で行なわれている社会的研究だけとすることがありうる。それは総合的計画という目標を維持するということがありうる。待つという解決法が「オージェ報告」の第1部より難しい第2部をついに実現することを可能にすることは、この遅れから生じる多くの不都合な点にもかかわらず、考えられることである。しかし、多分、状況は熟し、現在の若干の緊張は稀薄になっていることであろう。

何故ならば、この第2部の実現を困難にしている複雑な諸関係の真中に、驚くべき強さの情緒的な堆積層が存在するからである。文化体系の向う側に、異なった文化をもつ人々の間にある文化関係が深い不安の風土のなかで展開されている。少しアフリカに入ると、ヨーロッパ人は大きな不安を感じる。もしも、感じないならば、人間や事物に関する感覚が欠如しているか、あるいは、最低の教育さえ欠けているからである。この不安感は双方が共にかきたてている。

17世紀に中国人の文人が中国に最初に派遣されたポルトガル人、イエズス会宣教師と出会ったのち、息子にあてた手紙を複写したアメリカ人の著者から借りた次のテキストが、同様のことを類推させてくれるであろう。すなわち、「自称、海からやって来たこれらの人々は、きわめて毛深い猿の種族である。手に毛が生え、顔に大きな毛がある。また、彼らの体の他の部分は厚い毛によっておおわれていると私は思う。疑いもなく、彼らは人類であり、教育を受けるならば人間となることは不可能ではない。しかし、彼らが極端に粗野であり、我が国の農民のうちで最も教養のない者でさえ彼らよりもはるかに教養があることは確かである。しかしながら、彼らはある場所から他の場所へ異常に確実に移動する。」イエズス会宣教師も次のように自問したのではないだろうか。つまり、「長々とした哲学や非常に複雑な宗教や大変こみいった政治体系によって、あらゆる面で我々を凌駕している、すばらしい文化のなかに入れられていると感じていた。そして、他の人々と較べて私たちの人物の小さいことをきわめて明瞭に感じざるをえなかった。」とにかく、これは最近ポケット版で再版された本のなかでユック神

父^[1]が述べていることである。彼は（19世紀においてであるが）次のように語っている。受け入れられるために、彼はラマの服装をし、故国では「偉大なラマ」であると他の人々に説明したと。このような外観による補いは、彼にとって必要であり、これでうまくいったと彼は述べている。それ故、先程の中国の文人が書いていることについて、第二の解釈を与えることが恐らくできるだろう。つまり、双方とも、劣等感がたかまり、そのことによって感情の屈折とか誇張された優越感を主張するようになって、防禦の反応が生れてくるのである。

それ故、問題は人間を分離する「危機的距離」を乗り越えることにある。たがいに不信感をもっている2人の人間が遠く離れたら何も起らない。もしも逆にすぐ近くまで近づくならば、うまくいく。しかし双方が他に対して非常に不信感をいだいているため、2つの解決法、つまり、逃亡か攻撃しかない「危機的距離」がある。我々はおそらく、異なった文化をもつ諸国民のあいだで、大抵の場合、この危機的な距離にはいない。しかし、この危機的な距離は決定的なことであろうか。そして、もしもこの距離が乗り越えられるとしたら、人間を考える我々の方法の相互認識によって起る相互理解は、かなり増加するであろう。いずれにしても、今や相互のあいだの絆を結ぶことのできる諸国民がいる。最もよい位置を占めているのは多分、日本人であろう。何故ならば、彼らは全体として彼ら自身である唯一の国民だからである。つまり、帰宅すると着物を着るというように、日本文化をすべて保存しているからである。同時に彼らは西洋科学を十分に我がものとした。この話を日本人にすると、彼は全然、否定しない。そして、このことはある種の優越感をさ示している。何故ならば、彼は表現、感情、生活のリズムのなかに洗練さを持ち、同時にまた、我々の如く推論することができ、我々と同一の技術を使用することができる意識しているからである。ところで、彼らのなかには民族学者がいる。そして、ヨーロッパとアフリカにかかわる討論に

において、直接の当事者でない日本人の最初のアフリカ学者に大きな期待をかけることができる。それ故、我々は今、日本と共同でこの計画を持っているのであるから、日本が同様に熱心になるということは、非常に重要である。

総合した貸借対照表において、誰に問い合わせることができるかを知ることが、多分、問題として残されているであろう。この点に関する困難さは、問題となっている概念や理論のたて方の程度に応じて、明らかにむらがある。もちろん、我々の方法で裁断された人文、あるいは社会「科学」や、これらの専攻の専門家は滅多に見い出されないのである。若干の場合、インドを考えることができる。哲学者や賢人や人間関係を考える人々に訴える必要がある。中国では、そのジャンルはほとんど分離していないが、抽出し、接合する労さえいとわかないならば、理論的諸要素が豊富な文学がある。ある意味ではこの仕事はより単純であるが、所与の複雑さの故に、莫大な作業が予見される。なお、ヨガや中国医学のような技術は理由書とうまく組合わされている。この理由書には書き込みがされ、また、権威ある教示者によって役立つとみなされる個人的解釈が付け加えられて補完されるということができる。

実践に比して思索が余り発達していないように見えるところでは、より大きな困難に恐らく出会うであろう。しかしこの点に関しては、選択についての幻影が我々の側にあるのではないだろうか。彼らが人間や人間関係についての知識を如何に知っているかを考えた人々、熟考した人々、我々に説明できる人々を探さなければならない。彼らが我々のとは別の概念で説明するであろう。しかし、この問題の関心が存するのは、まさにそこなのである。このように述べることは、過度の楽観主義によって誤りを犯すことになるであろうか。

マルセル・グリヨール¹⁾はドゴン²⁾の形而上学をうまく語ることができた。そしてもしもこの報告者が時折、その註解書のなかで余りにも個人的な解釈をしすぎていないかと懸念した場合、我々

[1] Père Huc, サン・ラザール修道会の司祭、宣教師。『「タタールとチベット紀行の思い出」と題する書物の続編であるシナ帝国』 *L'Empire Chinois, faisant suite à l'ouvrage intitulé : Souvenirs d'un voyage dans la Tartarie et le Tibet*, Paris, 1854, 2 vol.

の追求している目的と結果とを比較したら、不都合な点などどこにあらうか。何故ならば、我々は共通概念で民族学をつくることを考えていないからである。我々に関心をいだかせるのは熟考であり、ねりあげることである。そして、その国民とか、村の政治的実態を熟考して、某氏が彼のたてている理論を我々に述べるのは、我々にとって情熱をかきたてることである。それはちょうど、西洋国家の社会学者が常識的な社会認識を表現するためでなく、そのような認識を越えて、そこから個人的解釈を引き出す場合と同様である。

さらにこの段階では、変装とか、仮面とか、話相手に順応したいという願望とか、あるいは話相手から守られたいという欲求が嫌われることがありうる。従って、結局、前の問題、つまり、危機的距離の問題に戻る。ある意味ではすでに始められていることであるが、理想としては、アフリカ人自身がアフリカ学者になることであり、すでに大部分実現していることであるが、インド人がインド学者になることである。そのとき、先程、我々が粗描した内的、社会的関係によって、民間伝承から幾分か隔たった描写を我々が得るといふ危険が残る。しかし、若い世代に現われている専念する姿勢に真剣な希望をかけることもできるのである。

遂には、つねに同じ障害にぶつかり、また、我々の意図を実施することは、こういう風にひどい妥協を強いられるとでもいうのであらうか。実際、未来については何ものも保証はできない。重要なのは、道理を持つことであり、地球的な規模の重要な利益をもつ何物かを提案することである。そして、慰めとなることは、我々以外の他の人々がこの利益を理解したことである。漸次、我々の歩みの方向は、だんだん明らかに認められるということが期待できるのである。

なるほど我が国の科学者がそれを愚かな企てと見ていることは確かにありうる。つまり、「ある一つの心理、すなわち、我々の実験室の心理しかないことがよくわかる。」諸々の富の狸算用に幾分か熱中することになる比較を始めることは望ま

ないで、原則論によって答えることは可能である。

言語活動や人間行動の実際が予め示した若干の過程、若干の変数を明らかにしないで、心理学者とか、あるいは社会学者が望むところの方法論的厳密さによって何ができるであらうか。もちろん彼はこれらの所与をなまの素材では手に入れないであらうし、また、科学者という彼の身分は総合的概念によって知覚できる所与から市井の人が想像しない機能的関係を、まさに築くことに在るのである。しかし、所与の制限は必然的に、総合の範囲を限定することになる。質問者の、あるいは、口答試問の意味論的装置は実験や計算の意味を明らかにする変数を自由に操縦する。同様に、実験の構成や解釈の図式の作成に必要な想像力は如何なることがあっても、人間関係のなかに見られる行動の過程と親近性をもっている。

我々の文明とは異なる別の文明によって隠匿されている概念や実践から出た諸理論の夫々の価値とか、理論の諸要素が如何なるものであっても、余りにも限定された一つの視点に捕えられた囚人として我々を把握させるこの利点——実際には、もっと多くあると思うが——を少くとも期待できる。他の人間観を知る機会がないので、少くとも、「客観性」の斯疇的性格を適当な距離をおかないで称讃することは我々にはない。

おそらく他の文明については、同数の哲学について語ることができるであらう。現在では、西洋哲学は涸渇している。常に同一で、また大抵いつでも、他の人類の経験をもたないで、西洋の人間や宇宙をめぐる若干のテキストと若干の主題の周りを、この西洋哲学は廻っている。西洋の哲学者が地球的規模の体験をもっていたら、哲学は驚くべき飛躍をなしているであらうということは納得できる。イエズ会の養成訓練に類似したものを受け入れる哲学の修道院を誰が建てるであらうか。10年間さまざまな国へ行つて、人間を発見し、次の10年間は見聞した事柄を省察してみよう。そうすれば、20年後に哲学することを始めるようになるであらう。

1) Marcel GRIAULE, (1898—1956) フランスの民族学者、元パリ大学教授、アフリカ研究、特にドゴン研究で著名。
2) マリ Mali のバンディアガラ高地に住む黒人部族。